

子どもの自立と未来を語る会の結果について

1 日 時 令和6年8月3日（土）午後1時15分～午後3時

2 場 所 東海市立勤労センター1階多目的ホール

3 結 果

(1) 参加者 75人

(内訳)

- ・保護者25人 ・生徒10人 ・教職員8人 ・その他12人
- ・パネリスト7人 ・コーディネーター1人 ・事務局12人

(2) 当日の内容

ア パネルディスカッション

- ・テ ー マ：不登校生徒の自立を支えるつながりと進路の問題
- ・内 容：卒業生、保護者、関係者による進路選択に関する経験談等
- ・パネラー：卒業生3人（高校生1人専門学生2人）
子どもが不登校の経験をした保護者2人
市スクールカウンセラー1人
社会福祉協議会職員1人
- ・コーディネーター：市スクールカウンセラー 鎌田 陽世氏

イ 就職、定時制・通信制高等学校、専門学校、サポート校等の進路先紹介

4 状 況

【パネルディスカッションより】

○高校生

- ・小学校高学年あたりから学校に行けなくなった。「ほっと東海」に入級し、異学年の友達と交流ができた。「青空教室」をはじめ、「ほっと東海」の行事に参加したことが一番の思い出となっている。現在は、三幸学園飛鳥未来高等学校に通っている。先生と生徒の距離が近く、何かあれば先生がすぐに相談にのってくれる。また、生徒会活動にもチャレンジし、大学進学を目標に頑張っている。しかし、学校に慣れるまでは、電車での通学が大変だったが、親が駅まで送ってくれるなど、温かいサポートがあったので休まず通うことができていた。人とのコミュニケーションを大切にしたい。そして、家族を信頼することを忘れずにいたい。

○専門学生①

- ・小学校5年生から学校に行けなくなった。中学校1年生で、親の海外転勤のため、海外の学校でも不登校になった。一時帰国の際は、地域の学校の部活動だけ参加していた。高校の進路を考える時に「ほっと東海」を親や先生から紹介してもらい、通級するようになった。N高等学校に進学できたが、再び学校に通えなくなった時期があった。ほっとプラザのボランティアに参加し、学校以外の場でいろいろな人と触れ合い、自分の世界を広げることができた。

今、学校に行けていないことで焦りや不安があると思うが、一度立ち止まっていいので、学校以外へ目を向けて、いろいろな経験を積んでみてほしい。

○専門学生②

- ・教室の騒がしい声や音がとても辛くなり、学校に通うことができなくなった。「ほっと東海」が安心できる場所になった。「ほっと東海」で年上の友達に勉強を教えてもらったり、「ほっと東海」の行事に参加したりして、学校では経験できないことがたくさんあった。「とにかくやってみよう!」「挑戦してみよう!」という思いを大切にしてほしい。通信制高校に進学したが、通学できるキャンパスがあり、異学年で授業を受ける。メンターと呼ばれる人が先生の役割をする。他にも大学生のアシスタントがおり、勉強を手伝ってくれる。先輩や後輩の距離が近く、友達がたくさんできた。学校に行かないという選択は勇気があるが、それを尊重してくれた親に感謝したい。不登校の児童生徒の中には、理由が分からず苦しんでいる人もいる。しかし、成長するにつれて不登校の理由や原因が分かってくるはずである。自分にあった環境で学びたいことを無理なく取り組める場所を見つけてほしい。

○保護者①

- ・中学校1年生の5月に学校に行けなくなった。前日まで、とても元気だった。それから毎朝「学校に行かなくていい?」と子どもが聞くようになり、戸惑い辛かった。親として学校に行かせなくてはいけないと思っていたが、苦しむ子どもに「学校にいかなくてもいいよ」と言えた日に、自分自身も気持ちが楽になった。親の役目を果たしながらも、子どもの一番の友達として接するよう心がけた。不登校の子どもを抱える親としては、心配が絶えないが子どもとの時間を大切にして、ゆっくり過ごしてほしい。子ども自身が不安や心配を抱えているので、親は温かく見守ってあげてほしい。

○保護者②

- ・中学校1年生の時に不登校になった。無理やり学校に行かせているうちに、子どもの表情がなくなり無気力になっていった。学校に行くことよりも、子どもの笑顔を取り戻したいと思った。「ほっと東海」に通い、「ほっと東海」の先生方に褒めてもらえたことを嬉しそうに教えてくれた。子どもは、「ほっと東海」が居場所となり、自信を取り戻すことができた。学校に通うことができなくても、進路の選択は少くないことを知った。中学校3年生になったある日子どもが「学校に行く」と言い、その後は休まず学校に通い、卒業することができた。親は子どもを信じ、子どもとの関わりを大切にしてほしい。親は、子どもを一番大切に思っている。親に、自分の思いや考えを素直に打ち明けてほしい。必ず、親はわが子の思いを受け止めてくれる。

○市スクールカウンセラー

- ・家族に不登校の子どもがいると親は心配だと思うが、将来に向けて考えていくチャンスである。このチャンスを生かし、親子で話し合うことが必要である。不登校は、先がなかなか見えない時期がある。しかし、その時期でも子どもは少しずつ成長していつている。自分の特技や楽しみを見つけて、生かしていっ

てほしい。

○社会福祉協議会職員

- ・義務教育の間は、学校の先生、養護教諭、ＳＣなどに相談できる。卒業後に困りごとを言える場所が必要である。その窓口として「ほっとプラザ」がある。「ほっとプラザ」だけではなく、相談場所は、たくさんあっていい。人に頼って、気持ちを吐き出すところ、自分が休める時間が大切である。「ほっとプラザ」を居場所として利用してほしい。居場所があることで自分探しができる。福祉機関が連携をとって、相談について色々な選択肢を指導させていただけるよう努めていきたい。

【感想】

○参加者保護者

- ・不登校の親として、聞きたいことがたくさん聞くことができてよかった。
- ・心折れる毎日ではあるが、明るく前向きに過ごしていきたいと思えた。
- ・様々なタイプの不登校の子どもがいるので、参考にしたいものかどうかわからなかったが、本人がどんな未来を望んでいるのか、何になりたいのか、何が好きなのか、そういうものが見えてくると一番いいのだらうと思った。
- ・初めて知ったこともあり、もっと早く色々な情報を知ることができるとよかった。
- ・市内に色々な相談窓口を用意してくださり感謝している。
- ・パネリストの皆様の実体験は学びと共感ばかりだった。先に光が見えた気がした。勇気と決断をもって、話してくださったことに感謝したい。
- ・心に響く言葉がいくつもあった。
- ・パネリストの皆様の話がとても参考になった。わが子の進路や将来に対してとても不安があり、ただ見守るだけでいいのか、他にできることがあるのではないかと焦っていたが、この会に参加したことで少し肩の力が抜けた。
- ・親が不安になりそうな時に相談できる場所を知ることができた。
- ・「ほっと東海」の卒業生のパネリストの実体験を聞くことができ、わが子にとっても肩の力を抜くことができたと思う。保護者のパネリストの実体験とアドバイスの言葉は、安心要素となった。
- ・進路の説明では、授業料等を知ることができてよかった。公立高校の進路を考えていたが、不登校になり経済面で心配があったため、大変参考になった。

○教員

- ・不登校の経験のある方や保護者の思いを聞くことができ、大変参考になった。学校にとって不登校に関する課題はとても大きく、一人一人の生徒を救いたいという心と裏腹に改善や向上があまりなく、担任等の負荷は増す一方である。「学校に通わなくていいんだよ」「学校以外にも居場所があるよ」と言える環境が整っていくことが大切であると日々感じている。
- ・学校では、「ほっと東海」に通っている（通っていた）子どもだけでなく、朝のみや夕方に登校している生徒もパネリストとして招いてもいいのではなかという声がある。
- ・パネルディスカッションを通して、子どもや保護者の視点から意見を聞くこと

ができ、新鮮な気持ちになった。不登校であったことを事実として受け入れ、誰も誰かを責めないところが印象的だった。

○生徒

- ・会に参加して、不登校でも様々な選択肢があることが分かった。
- ・実際に不登校を経験した方々の話を聞くことができてよかった。
- ・不登校の方々の話を聞いて、自分だけではないと安心した。また、保護者の方の話を聞くことができたのでよかった。通信制の高校には、色々なコースがあり、選択肢がたくさんあることに安心した。進路に対して不安を感じていたため、参加してよかった。

○その他

- ・毎年参加しているが、実際に経験したことを話してくださるので説得力があり、同じようなことで悩んでいる方々にとって不安が和らいだり、次に向かう言動力になったりした。
- ・ほっとプラザで関わった生徒が登壇され、夢に向かって活動されていることを聞くことができ嬉しく思った。
- ・本人も保護者も渦中にいる時は、様々な思いと闘っているのだろうと感じた。現在、悩まれている方々の励ましや勇気を与えてくれる会になったと思う。

5 来年度へ向けて

- ・パネリストの話に引き込まれるように熱心に話を聞いていた。終了後の感想から、思いを共有したり、励みになったりする貴重な機会となっていることを感じた。不登校が増加する中、今後も会を継続する必要がある。
- ・教員にとっても様々な経験を経た立場から話を伺える貴重な場であり、小中学校関係なく、不登校傾向の児童生徒の義務教育後の進路について学ぶことができるので、今後も参加を勧めたい。
- ・パネリストや参加される保護者にとって休日の開催がよいと考えるが、教員の参加が少ないことが課題である。各校の不登校担当者の参加を呼びかけていきたい。